

## 死んでもいい

2008. 07. 15 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

### 引用聖句

#### エステル記 3章1節から6節

この出来事の後、アハシュエロス王は、アガグ人ハメダタの子ハマンを重んじ、彼を昇進させて、その席を、彼とともにいるすべての首長たちの上に置いた。それで、王の門のところにいる王の家来たちはみな、ハマンに対してひざをかがめてひれ伏した。王が彼についてこのように命じたからである。しかし、モルデカイはひざもかがめず、ひれ伏そうともしなかった。王の門のところにいる王の家来たちはモルデカイに、「あなたはなぜ、王の命令にそむくのか。」と言った。彼らは、毎日そう言ったが、モルデカイが耳を貸さなかったので、モルデカイのこの態度が続けられてよいものかどうかを見ようと、これをハマンに告げた。モルデカイは自分がユダヤ人であることを彼らに打ち明けていたからである。ハマンはモルデカイが自分に対してひざもかがめず、ひれ伏そうともしないのを見て、憤りに満たされた。ところが、ハマンはモルデカイひとりに手を下すことだけで満足しなかった。彼らがモルデカイの民族のことを、ハマンに知らせていたからである。それでハマンは、アハシュエロスの王国中のすべてのユダヤ人、すなわちモルデカの民族を、根絶やしにしようとした。

#### エステル記 4章13節から16節

モルデカイはエステルに返事を送って言った。「あなたはすべてのユダヤ人から離れて王宮にいるから助かるだろうと考えてはならない。もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」エステルはモルデカイに返事を送って言った。「行って、シュシャンにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食をしてください。三日三晩、食べたり飲んだりしないように。私も、私の侍女たちも、同じように断食をしましょう。たとえ法令にそむいても私は王のところへまいります。私は、死ななければならぬのでしたら、死にます。」

#### へブル人への手紙 11章32節から38節

これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル、預言者たちについても話すならば、時間が足りないでしょう。彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士

となり、他国の陣営を陥れました。女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、——この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。——荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。

今、読んでくださった箇所を見るとわかりますが、この世の歴史には何一つ新しいことはありません。繰り返し、繰り返し、同じことばかり起きているのではないのでしょうか。人間は、歴史から何を習ったかと言いますと、何も習っていないということになります。世界の歴史の流れの中で「宗教」においては、イエス様だけを大事にする人々はいつも迫害されたのです。誰から迫害されたかと言いますと、それは無神論者からではなく、いわゆる「キリスト教」からです。考えられない事実です。カトリック教会は、何百年もの間、聖書を持つ人々、聖書を読む人々を迫害して殺したのです。今日まで悔い改めようとしません。何故なら、それは「法王」たちが神の代表者だからです。何年か前に、パウロ2世でしたでしょうか、亡くなる時、彼が「私のために祈ってください。天国に入れるように」と頼んだということです。笑い話ではなくて事実だったでしょう。なぜなら、「救いの確信を持つ人は、呪われよ」。これが、カトリック教会の教えだからです。本当に恐ろしいことではないかと思えます。

今司会をされた兄弟はだいたい毎回聞くのです。「今日のテーマは？」と。それなので、ちょっと考えて、『死んでもいい』と言ったのです。今、読みましたエステル記4章16節の後半に書いてあるからです。

エステル記 4章16節後半

**「私は、死ななければならぬのでしたら、死にます」。**

つまり、「自分は大切ではない。死んでもいい」。この態度をとったのが、初代教会の人々だったのです。

コリント人への手紙・第二 4章18節

**私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。**

この態度をとる者は、時代遅れで、おかしいと思われそうですが、しかしイエス様によって救われた人々にとっては、この態度をとらざるを得ないのではないのでしょうか。

ソロモン王は、

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。

と。これは厳しいことばです。けれど、幸福への道ではないでしょうか。「理性」はそのようなことを否定しても、「信仰」はこの態度をとらざるを得ないのです。

以前、茨城県的那珂湊にいた頃、ある日二人の学生が家まで来ました。その目的は何かと言いますと、大学で論文を書かなくてはいけないから、でした。テーマは「理性と信仰」だったのです。二人は、聖書を知らないので「理性というものはどういうものか少しはわかるけれど、『信仰』とはどういうものか全くわかりません。ですから教えてください」ということだったのです。

私たちが「理性と信仰」について考えるべきではないでしょうか。なぜなら、イエス様に出会った者のとるべき態度は、「理性的」なものではなく、「信仰的」なものであるからです。

「理性」なら、もちろん誰でもわかります。それはどういうものかと言いますと、「概念を作る能力」です。「結論を出す能力」です。つまり、「判断を下す能力」のようなものです。神様から人間に与えられている素晴らしいものです。動物は、そのような能力を持っていません。いろいろなことをしたとしても、本能的にしているのです。そのような理性を、動物はもちろん持っていません。しかし、人間がそのような素晴らしい能力を持っていたにしても、何と多くの見間違い、計算違い、あるいは意味のないことをして、頭を抱え込んでいることでしょう。

この理由から、ソロモンは「心を尽くして主に拠り頼め」と書いたのです。「主にのみ、拠り頼め。自分の悟りにたよるな」と。

なぜ、「自分の悟りにたよるな」と聖書は語っているのでしょうか。人間は悪魔によって騙されて以来、闇の中に置かれるようになってしまったからです。

この状態について、エペソ書4章17節、18節に、次のように書き記されています。

エペソ人への手紙 4章17節後半

もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。

御霊に導かれない限り、むなしい心で歩む可能性がある、と。

18節

彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。

これは主の人間に対するご判断です。神のいのち、すなわちイエス様を持っていない者はその知性において暗くなっている、と聖書は記しています。

よく引用されるローマ書1章28節に、  
ローマ人への手紙 1章28節

彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。

もちろん今の時代にこのような言葉は当てはまりません。やりたいことは何でも行なって良いのではないか、どうしてそれが悪いのか、と。結局、聖書を基本にして考えないとすれば、過ちに陥ります。主を恐れないことは、悲劇そのものです。

テモテ第二の手紙の中で、「彼らは真理に逆らう」と書いてあります。「いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることのできない者たちです」と。

真理に逆らう者は、救いの神を体験的に知ることができません。自分の理性に頼ることとは、破滅と悲劇とに終わるのです。あらゆる人間の知識は限られており、不完全です。  
コリント人への手紙・第一 13章9節

というのは、私たちの知っているところは一部分であり、預言することも一部分だからです。

と、パウロは書いたのです。多くの人々は、知識によって傲慢になり、自己実現に終わる危険性に直面しているのです。人間の知識が限られているということをよくわきまえている者は、「信仰」を必要とします。「信仰を持つ」すなわち、イエス様の御許（みもと）に来る者は経験します。それは、『このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。（コロサイ2：3）』と書かれているからです。ですから、人生においてイエス様を体験的に知ることが一番大切なことなのです。

しかしこのような「正しい知識」と「認識」とは、ただ「上からの光」によって、また「啓示」によってのみ、明らかにされるのです。イエス様を体験的に知ることが、「上からの啓示」を前提としているのです。

パウロの正直な証し、聖書学者としての証しは、ガラテヤ書に書かれています。  
ガラテヤ人への手紙 1章12節前半

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。

私の信仰の土台は一つの教えではありません、と。  
12節後半

ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

「神は、御子を私のうちに啓示してくださった」と、パウロは喜んで証ししたのです。ただ啓示によってのみ、自分の「本当の状態」、すなわち「罪の状態」を知ることができ、そ

れを通して、イエス様を体験的に知ることができるようになるのです。そして、イエス様を認識することこそ、真の「信仰」です。

すなわちイエス様を体験的に知ることによって初めて、私たちは恵みにあずかることができ、平安と永遠のいのちを自分のものにすることができるのです。

ペテロの手紙・第二 1章2節

**神と私たちの主イエスを知ることによって、恵みと平安が、あなたがたの上にあります。ますます豊かにされますように。**

結局、イエス様についてのいろいろな知識ではなく、「イエス様ご自身を知る」ことこそが、大切なのです。イエス様は、祈りの中で証しなさいました。

ヨハネの福音書 17章3節

**「そのいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」**

イエス様を「体験的に知る」ことによって、滅ぶべき罪人である者にもかかわらず、主の恵みを得、真の平安をいただき、「永遠のいのち」にあずかることができる人々は、本当に幸いです。

今までのことをまとめてみると、次のことが言えるのではないかと思います。

人間の「理性だけ」に集中して考えることは、この世的なことであり、必ず限界にぶつかってしまうことになるのです。人間の理解力は、確かに論理的であるかもしれませんが、しかし、突き詰めていくと内面的な虚しさに帰結してしまうのです。

それに対して、「イエス様の与えられる信仰」は、あらゆる人間の認識、また理性に勝っています。ですから、パウロは言うことができたのです。

ピリピ人への手紙 3章8節

**私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらを持ちあくとと思っています。**

素晴らしい証しです。何故パウロがこのような出来事に遭遇していたかと言いますと、彼はイエス様の愛を体験的に知ることによって、その愛に満たされ、主の平安を味わい知ることができたからです。『人知をはるかに越えたキリストの愛（エペソ3：19）』、『人のすべての考えにまさる神の平安（ピリピ4：7）』とあります。

信仰とは、「主なる神に対する絶対的な信頼」です。これに対して人間の理性は、自分の体や命を心配しますが、その結果は不信仰に終わります。パウロは、次のように書かなくてはなりませんでした。辛かっただろうと思います。心の痛みだったに違いありません。

ピリピ人への手紙 2章21節

**だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。**

これは、私たちにも当てはまる言葉であるかもしれません。

人は四つの大きな願いを持っていると言われています。これによって、人は自分のことを思っているかどうかがわかるのではないかと思います。

\*第一に、人は身の安全を願います。

すべての人があらゆる面で、安全でありたいと願っています。人はお金を銀行に預金し、将来子供に教育を与えようとし、また、老後のことを考えて生命保険に入ったりします。これは、自らの安全を図る策にほかなりません。

イエス様は、「地に宝を蓄えるな。思い煩ってはならない。まず神の国と神の義を求めよ。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられるのである」と。嘘を知らないイエス様は約束しておいでになります。もちろんお金だけではなく、教育のことを考えても、人々はそこに安全を求めていることがわかります。福音を宣べ伝える場合も、まず神学校を出て初めて一人前になり、人の前で話すことができるのだ、と考える人もいます。これも一つの身の安全を考えている心にほかなりません。

パウロの証しは、考えられないほど大切です。

コリント人への手紙・第一 2章2節

**私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。**

「イエス様の教えを宣べ伝えても本当の意味での助けにならず、十字架につけられたイエス様を紹介しなければ、御霊は働かない」とパウロは悟るようになり、このように決心したのです。

かつて、パウロが、自分の身をイエス様に任せ、イエス様に委ね切るとするならば不安定な者になるのではないかと、さらに危険にさらされ、不安を身に感じ、死ぬのではないかと考えた時があったことも、聖書は記しています。パウロはまた、「私は圧迫されている。私には逃げ道がない。迫害され地に倒された者のようになっている」と告白しています。これは、「安全」とはおおよそかけ離れた状態ではないでしょうか。

\*二番目に、人々が願っていることは、安楽です。

人の心の中で深く願っていることは、安楽な生活を送りたい、この身を労わって生きたいという願いです。これをイエス様は全く願われなかったのです。イエス様は次のように告白なさいました。

マタイの福音書 20章28節

「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

イエス様は、ご自分のいのちを与えるために遣わされたのです。福音書を読むとわかります。イエス様は、この地上に一つの持ち物すらも持っておいでにならなかったのです。「この世のふるさと」を持っておいでにならなかったのです。イエス様は、辱められても黙り、誤解されても自らを弁護せず、黙々として歩まれたのです。

イエス様については、「わたしは虫であって、人ではない」の、詩篇22篇6節の作者の言葉がぴったり当てはまるのではないかと思います。人間は自らを弁護することができますが、虫はそのようなことはできません。蛇と虫の違いは、大きさと力が違うだけではありません。蛇は身の危険を感じると鎌首をもたげて向かってきますが、虫は何もしないというところに違いがあります。

私たちの自我は、あたかも蛇に似ているのではないのでしょうか。虫はどのようにされても、逆らうことをしません。ただなすがままにされています。

イエス様は、「わたしは虫である」とおっしゃることができたのです。イエス様は、辱められ、殺されました。イエス様は、私たちのために虫となってくださったのです。このイエス様は、「父がわたしを遣わしてくださったように、わたしもあなたがたを遣わす」とおっしゃいました。

イエス様は、私たちの「自我」が打ち砕かれ、ヤコブが主と相撲を取って「自我」を砕かれたように、私たちも己に死んで、主に仕えるようになることを望んでおられます。私たちが簡単な安楽な生活を願わず、ただイエス様のなされた生活を願い、それを行なうなら、本当に幸いです。

しかしその以前に、まず私たちは自分自身の心の状態を考えることが必要です。私たちは例外なく、自ら偽り、また、打たれたとき逆らっている蛇のような性質を持っています。

人間はみな、身の安全を願います。また、安楽な生活を送りたいと願っています。

\*三番目、人間の願っていることは、楽しむことです。

私たちは疲れると休むと言いますが、この休みがみことばを学ぶことを怠り、祈ることを休み、集会に集うことをやめることを意味しているとするなら、それはちょっと問題です。霊的ないのちを殺してしまうことを意味しているかもしれません。

主は私たちの心の状態をよく知っておられます。私たちが、自分の時、自分の富、自分の計画、自分の楽しみを持っているかどうか、あるいは、「イエス様、私の持っているものはみな、あなたのものです。あなたのみこころを明らかにしてください」と願っているかどうか、主はすべてをご存じです。

イエス様は、「わたしは自分のいのちを与えるために来ました、仕えるために来ました」

と言われ、「わたしは自分の願いを持ちません。自分の立場をとりません。どうか、わたしの思いでなく、父よ、あなたのみこころを成してください」という態度をとり続けられたのです。

\*四番目、人の心に深く根ざしている願いは、人に認められたい気持ちです。

人は、何とかして自分に人気を集め、人々に自分の力を及ぼしたいという願いを心の中に潜ませています。大切にされ、誉れを得、自分を忘れてもらいたくないという願いを持っています。人に認められたいと願う人は、惨めな人と言わなければなりません。救われた者たちの世界にも、この、「人から誉れを得たい」という願いがあります。伝染病のように入ってきています。このために多くの人々は、主に用いられなくなっているのではないのでしょうか。

イエス様は、「人からの人気を求めず、上のものを求めよ」とはっきりおっしゃいました。私たちは、地を這う虫のように地上のことばかりを考えず、ひたすら上のものを求める者になりたいものです。

これら四つの、安全を願う心、安楽を願う心、楽しみを求める心、人気を得たいと願う心はどこから来るのかと言いますと、傲慢な人間の心からです。

イエス様の救いにあずかるようになったガラテヤに住んでいる兄弟姉妹に、パウロは、次のように書いたのです。

ガラテヤ人への手紙 5章19節から21節

**肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。**

「あなたがた」とは、信じる者です。これらの肉の働きは、結局、みな自分の誇り高ぶる心から出て来るのです。外側は問題ではありません。中身です。

先週でしたか、北海道でサミットが開かれ、各国から偉い人々が集まりました。結局、みな外側のことを考えるのです。今、早くブレーキかけないと大変なことになる、との通りです。けれどわかるでしょう。今の地球を天国のようにしても、すぐにおかしくなります。問題は人間の心です。心が変わえられなければ、何も良くなりません。

イエス様も、はっきり同じことをおっしゃいました。

マルコの福音書 7章20節から23節

また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、

人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、食欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」

「人から出るもの、これが…」とおっしゃいました。「未信者から」と書いてないのです。信者も含まれています。

環境を良くすることができても、問題は解決しないのです。さらに滅びに向かって、多くの人々が希望なく生きているのではないのでしょうか。イエス様の話を聞かないまま歩み続けていくのでしょうか。これは、もちろん全部信じる者の責任です。それは信者が自分のことだけを願っているからです。

なぜ、イエス様のからだである私たち兄弟姉妹は、弱く、力なく、悪の霊と闘うに弱いのでしょうか。それは、私たちが自分のことを考えているからです。なぜ多くの人々は生ぬるく、不熱心で、自己満足しているのでしょうか。それは、自分のことばかりを求めているからです。

まとめてみると、

- ・信仰とは、主に対する絶対的な信頼です。そして理性とは、自分の体や命を心配しますが、その結果は不信仰に終わるといことです。そして、聖書の中で最も厳しい言葉の一つは『信仰から出ていないことは、みな罪です。(ローマ14：23)』。これはイエス様につながらないで、自分で動いたりすることは、主の目からご覧になると全部罪だということなのです。
- ・更に、信仰とは、全知全能なる主のすべてを確信することです。これに対して、人間の理性は、主の全知全能なることを疑います。これもまた、不信仰の表われです。
- ・また、信仰とは、目に見えないお方を見ることです。これに対して人間の理性は、心配そうに目に見えるものだけを見るのです。これもまた不信仰の表われにほかなりません。
- ・それゆえ、イエス様を信じるということとは、自らを主に委ねることです。イエス様は私たちを完全に支配する権利を持っておられるので、そのことを私たちに要求しておいでになるのです。
- ・信仰とは、「みことばに対して全く従順」であることをも意味します。
- ・信仰とは、あらゆる罪に背を向けて離れることです。

ですから、このように信じている兄弟姉妹は、この世では異分子であるとも言えるわけです。イエス様を信じる者は、理解されず、人から笑われる存在です。そのため人々は、信じる者を馬鹿にしたり、哀れんだりするのです。多くの人々は信じる者を憎み、迫害します。しかし、イエス様の御名のゆえにすべてを投げ捨てても悔いるところはない、という確信こそ私たちの喜びの源です。

聖書を読むと、いろいろな実例が出てきます。

・例えば三千五百年前にモーセは、「自分はどうでもいい。大切ではない。用いてもらいたい」と思うようになりました。

ご存じのように彼は王子でありましたので、すべてが自分の思い通りにできたわけです。望むものは全部自分のものとなったのです。しかし彼は、そのように恵まれた自分の境遇を投げ捨ててしまいました。ちょっと考えられないことです。モーセは世界一の愚か者だったのではないのでしょうか。どうしてそんな愚かなことをしたのでしょうか。ヘブル書の11章に書かれています。

ヘブル人への手紙 11章24節

**信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、**

よく考え、祈った結果です。

ヘブル人への手紙 11章25節、26節

**はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。**

主から目を離さなかったからなのです。

ヘブル人への手紙 11章27節

**信仰によって、彼は、王の怒りを恐れなくて、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見るようにして、忍び通したからです。**

このモーセは、エジプトの富を持っており、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれたのですが、これらは彼にとって、はかない罪の楽しみと思われるようになってしまったのです。彼は、この世の富や教養と、とこしえの報いとを比較して、その結果、このような決断を行なったのです。

彼は、この世のいろいろな楽しみの結果は「死」であること、そして、その死後には裁きが下って永遠の滅びに行くべきことをよく知っていました。そのような意味で、彼はこの世とは違った、別の世界に住んでいたと行うことができるでしょう。モーセは、すべての富を自分の手中に置き、指導者としての才能も備えておりましたが、そのような賜物を捨てたのです。「永遠の冠のゆえに、この貧しき生涯捧げん」、そのような心構えを持っていたのです。前に話しましたように、「私は死ななければならないのでしたら、死にます」。私たちも、常にこの心構えを持つことができれば、本当に幸いです。

・もう一つの例は、三千三百年前の人であるルツという女性です。

彼女は、父、母、ふるさとを捨てました。父、母、生まれた国を離れ、これまで知らなかった民のところに彼女は行ったのです。彼女は自分の身の安全やぬくもりなどを捨てて、

これまで知らなかったところへ来ました。「そのようなことをせずに、ここにとどまりなさい」と彼女に注意した人々はいました。けれど、彼女は姑であるナオミを通して、全知全能なるお方を知り、そのゆえにこれらのものを、喜んで捨てることができたのです。

このような道に歩みを踏み出したルツは、その翼の下に避けどころを求めた主から豊かな実を、また報いを受けたのです。彼女は人間的な安全を捨て、主のみ翼の下に本当の平安を見出しました。「私は死ななければならないのでしたら、死にます」という決心を持った彼女は、決して失望することはありませんでした。私たちもこの態度をとることができれば、決して失望することはありません。

・また、二千六百年前に生きていたダニエル、そして、ダニエルの友だちについて考えてもわかります。

ダニエルの三人の友人たちは、本当にあらゆる心配から、不安から解放されたのです。彼らの特徴は、妥協なき態度でした。「妥協するよりも死んだ方がましだ」と彼らは思ったのです。ですから、三人とも火の中に投げ込まれたのです。彼らは、単なる理想主義者、あるいは空想家だったのでしょうか。彼らは思慮を失ったか、あるいはどうかしてしまったのでしょうか。決してそうではありません。

当時の世界を治めたネブカデネザル王と、三人の友人たちの言葉です。

ダニエル書 3章15節後半から18節

「私が造った像を拝むなら、それでよし。しかし、もし拝まないなら、あなたがたはただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。どの神が、私の手からあなたがたを救い出せよう。」シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」

日本の神風特攻隊は、ある意味で理想主義者たちでした。今やその精神は、日本のどこへ行ってもないのではないのでしょうか。ドイツでも同じように、何万人もの人々がヒトラーのために死ぬことは特権だと思い込んでしまったのです。現在ドイツで、そのような気持ちを持つ人は一人もいません。

しかし、二千六百年前のこれらの三人と同じように、どんなことがあっても決して妥協しないというキリスト者が、こんにちでも大勢います。彼らは、決して命を粗末にしてもかまわないとは思ってはいません。主なる神の全知全能に拠り頼み、目に見えないお方を心の目で見ているからです。

三人は言いました。「私たちは死ななければならないのでしたら、それで結構です。死にます。しかし、どんなことがあっても、決して妥協することは致しません」と。

もちろんダニエルも同じ態度をとりました。彼は、祈ることを禁じられていたのです。変な命令です。一箇月の間、祈ることを許されなかったのです。けれども、聖書に何と書いてあるかと言いますと、

ダニエル書 6章10節後半

彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

恐れて向こうを向いて、ではありません。祈りながら感謝したのです。彼は、窓を閉めて誰にも気づかれないように祈るという賢い方法をとることもできたはずです。押入れの中で音をたてないようにして。けれどダニエルは、窓を開けて祈るという、普通の人にはちょっと理解できない、一見愚かと思われる方法をとりました。彼は、その当時、知恵者でありましたが、このような愚かと思われる態度をとったのです。彼は、大変危険を伴うこのようなやり方を、意識して行なったのです。しかし、彼は、自分自身のためを考えてそうしたわけではありません。主の名誉のためにそうしたのです。結局、「私は殺されても結構です」と。

私たちは、自分たちの生活を振り返ってみると、ダニエルの祈りの生活と、あまりにもかけ離れていることを思い、恥じ入らざるを得ないのではないのでしょうか。

・二千五百年前のエステルという女性も、自分のことを知りながら、敢えてそれを行なったのです。

彼女がとった態度は、獅子の穴に手を入れるよりも危険なことでした。しかし、彼女は、無思慮にこのようなことをしたのではなく、三日間断食して祈った後に言ったのです。「私は死ななければならぬのでしたら、死にます」と。

彼女はこの態度をとりましたので、ユダヤ人は一人も殺されなかったのです。しかし、当時知られている世界に命令が出されたのです。「何月何日、ユダヤ人をみな殺してしましましょう」と。それは決定されたことだったのです。しかし彼女が、自分の命を大切にしなかったので、ユダヤ人は一人も殺されませんでした。この悪魔の道具であるハマーンが、その反対に殺されてしまったのです。

・千九百何十年前に、バプテスマのヨハネという預言者がいました。

彼は、何と言ったかと言いますと、「あの方、すなわちイエス様は盛んになり、私は衰えなければなりません。私自身は決して大切ではない。ただ、イエス様のご栄光だけが崇められますように。そのために、私は死ななければならぬのでしたら、死にます」と。

バプテスマのヨハネは殺されました。殺される直前、イエス様が本当に来たるべきメシアであるかということを確認するために、ヨハネは弟子をイエス様のところへ遣わしたのです。それに対して、イエス様は、はっきりとお答えになりました。

マタイの福音書 11章5節

「盲人が見、足なえが歩き、らい病人がきよめられ、つんぼの人が聞こえ、死人が生

き返り、貧しい者には福音が宣べ伝えられているのです。」

そのことによって、ヨハネは、イエス様が本当に来たるべき救い主であることを知り、自分が殺されることに何の躊躇も、定められた自分の死に対する抵抗の気持ちも持つことなく、これこそ然るべき結果であることと確信しつつ、すべてを主の御手に委ねたのです。「私は死ななければならないのでしたら、死にます」と。

私たちが大切なのではなく、イエス様のご栄光だけが大切なのです。毎日、この態度をとることができれば、主は、本当に大いに働くことができになるのです。バプテスマのヨハネは殺された時、その首が転がり落ちました。けれども、彼こそ、救い主なるイエス様を紹介した結果として、多くの人々は悔い改めて、信じるようになったのです。「見よ。世の罪を取り除く神の小羊」。これこそが、彼のメッセージでした。

・最後に、パウロ、またパウロと一緒に働いている人々について考えると、同じことが言えます。

確かに、パウロの生涯は非常に輝かしいものでした。当時最高の名誉であったローマの市民権も、また天才的な才能をもっており、最高の学問と教養を身につけており、将来を非常に有望視された男でした。ユダヤ教徒であった時のパウロ自身の判断と確信によると、イエス様は最大の偽善者、偽り者だったのです。そのために、パウロは、イエス様を信じる者たちを迫害し続けたのです。

しかしある日、パウロはこのイエス様に出会いました。このイエス様との出会いによって、彼は、自分が今まで悪魔によって盲目にされていたことを一瞬にして示されました。そして、かつては迫害者であったパウロが、燃えるような福音の戦士となったのです。

彼の証しは本当に素晴らしいものです。

ピリピ人への手紙 3章7節、8節

私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

意味は、「私は死ななければならないのでしたら、死にます」です。

この心構えを持つ人々こそ、大いに祝福されるようになるに違いありません。

了